<卒業論文分科会・担当指導教員　××××先生>

202＊年度　卒業論文

論文タイトル

－論文サブタイトル（無い場合は削除）－

メディア情報学科

XA20\*\*−\*\*\*　城国　太郎

城西国際大学　メディア学部

<卒業論文分科会・担当指導教員　××××先生>

論文タイトル

－論文サブタイトル（無い場合は削除）－

城国　太郎

【概要】

僕は日本の古代文化に就て殆んど知識を持っていない。ブルーノ・タウトが絶讃する桂離宮も見たことがなく、玉泉も大雅堂も竹田も鉄斎も知らないのである。況んや、秦蔵六だの竹源斎師など名前すら聞いたことがなく、第一、めったに旅行することがないので、祖国のあの町この村も、風俗も、山河も知らないのだ。タウトによれば日本に於ける最も俗悪な都市だという新潟市に僕は生れ、彼の蔑み嫌うところの上野から銀座への街、ネオン・サインを僕は愛す。茶の湯の方式など全然知らない代りには、猥りに酔い痴れることをのみ知り、孤独の家居にいて、床の間などというものに一顧を与えたこともない。

　けれども、そのような僕の生活が、祖国の光輝ある古代文化の伝統を見失ったという理由で、貧困なものだとは考えていない（然し、ほかの理由で、貧困だという内省には悩まされているのだが――）。

目次

1. ＊＊＊＊＊＊＊ 1
   1. ＊＊＊＊＊＊＊ 1
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 2
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 3
   2. ＊＊＊＊＊＊＊ 4
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 4
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 5
   3. ＊＊＊＊＊＊＊ 6
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 6
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 7
2. ＊＊＊＊＊＊＊ 8
   1. ＊＊＊＊＊＊＊ 8
   2. ＊＊＊＊＊＊＊ 9
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 9
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 10
   3. ＊＊＊＊＊＊＊ 12
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 12
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 13
   4. ＊＊＊＊＊＊＊ 14
3. ＊＊＊＊＊＊＊ 15
   1. ＊＊＊＊＊＊＊ 15
   2. ＊＊＊＊＊＊＊ 16
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 16
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 17
   3. ＊＊＊＊＊＊＊ 18
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 18
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 19
   4. ＊＊＊＊＊＊＊ 20
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 20
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 20
   5. ＊＊＊＊＊＊＊ 21
4. ＊＊＊＊＊＊＊ 22
   1. ＊＊＊＊＊＊＊ 22
   2. ＊＊＊＊＊＊＊ 23
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 23
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 24
   3. ＊＊＊＊＊＊＊ 25
      1. ＊＊＊＊＊＊＊ 25
      2. ＊＊＊＊＊＊＊ 26
5. ＊＊＊＊＊＊＊ 27
   1. ＊＊＊＊＊＊＊ 27
   2. ＊＊＊＊＊＊＊ 28

脚注 29

参考文献 30

1. ＊＊＊＊＊＊＊
   1. ＊＊＊＊＊＊＊
      1. ＊＊＊＊＊＊＊

　僕は日本の古代文化に就て殆んど知識を持っていない。ブルーノ・タウトが絶讃する桂離宮も見たことがなく、玉泉も大雅堂も竹田も鉄斎も知らないのである。況んや、秦蔵六だの竹源斎師など名前すら聞いたことがなく、第一、めったに旅行することがないので、祖国のあの町この村も、風俗も、山河も知らないのだ。タウトによれば日本に於ける最も俗悪な都市だという新潟市に僕は生れ、彼の蔑み嫌うところの上野から銀座への街、ネオン・サインを僕は愛す。茶の湯の方式など全然知らない代りには、猥りに酔い痴れることをのみ知り、孤独の家居にいて、床の間などというものに一顧を与えたこともない。

　けれども、そのような僕の生活が、祖国の光輝ある古代文化の伝統を見失ったという理由で、貧困なものだとは考えていない（然し、ほかの理由で、貧困だという内省には悩まされているのだが――）。

　タウトはある日、竹田の愛好家というさる日本の富豪の招待を受けた。客は十名余りであった。主人は女中の手をかりず、自分で倉庫と座敷の間を往復し、一幅ずつの掛物を持参して床の間へ吊し一同に披露して、又、別の掛物をとりに行く、名画が一同を楽しませることを自分の喜びとしているのである。終って、座を変え、茶の湯と、礼儀正しい食膳を供したという。こういう生活が「古代文化の伝統を見失わない」ために、内面的に豊富な生活だと言うに至っては内面なるものの目安が余り安直で滅茶苦茶な話だけれども、然し、無論、文化の伝統を見失った僕の方が（そのために）豊富である筈もない。

　いつかコクトオが、日本へ来たとき、日本人がどうして和服を着ないのだろうと言って、日本が母国の伝統を忘れ、欧米化に汲々たる有様を嘆いたのであった。成程、フランスという国は不思議な国である。戦争が始ると、先ずまっさきに避難したのはルーヴル博物館の陳列品と金塊で、巴里の保存のために祖国の運命を換えてしまった。彼等は伝統の遺産を受継いできたが、祖国の伝統を生むべきものが、又、彼等自身に外ならぬことを全然知らないようである。

　伝統とは何か？　国民性とは何か？　日本人には必然の性格があって、どうしても和服を発明し、それを着なければならないような決定的な素因があるのだろうか。

　講談を読むと、我々の祖先は甚だ復讐心が強く、乞食となり、草の根を分けて仇を探し廻っている。そのサムライが終ってからまだ七八十年しか経たないのに、これはもう、我々にとっては夢の中の物語である。今日の日本人は、凡そ、あらゆる国民の中で、恐らく最も憎悪心の尠い国民の中の一つである。僕がまだ学生時代の話であるが、アテネ・フランセでロベール先生の歓迎会があり、テーブルには名札が置かれ席が定まっていて、どういうわけだか僕だけ外国人の間にはさまれ、真正面はコット先生であった。コット先生は菜食主義者だから、たった一人献立が別で、オートミルのようなものばかり食っている。僕は相手がなくて退屈だから、先生の食欲ばかり専ら観察していたが、猛烈な速力で、一度匙をとりあげると口と皿の間を快速力で往復させ食べ終るまで下へ置かず、僕が肉を一きれ食ううちに、オートミルを一皿すすり込んでしまう。先生が胃弱になるのは尤もだと思った。テーブルスピーチが始った。コット先生が立上った。と、先生の声は沈痛なもので、突然、クレマンソーの追悼演説を始めたのである。クレマンソーは前大戦のフランスの首相、虎とよばれた決闘好きの政治家だが、丁度その日の新聞に彼の死去が報ぜられたのであった。コット先生はボルテール流のニヒリストで、無神論者であった。エレジヤの詩を最も愛し、好んでボルテールのエピグラムを学生に教え、又、自ら好んで誦む。だから先生が人の死に就て思想を通したものでない直接の感傷で語ろうなどとは、僕は夢にも思わなかった。僕は先生の演説が冗談だと思った。今に一度にひっくり返すユーモアが用意されているのだろうと考えたのだ。けれども先生の演説は、沈痛から悲痛になり、もはや冗談ではないことがハッキリ分ったのである。あんまり思いもよらないことだったので、僕は呆気にとられ、思わず、笑いだしてしまった。――その時の先生の眼を僕は生涯忘れることができない。先生は、殺しても尚あきたりぬ血に飢えた憎悪を凝らして、僕を睨んだのだ。

* + 1. ＊＊＊＊＊＊＊

　このような眼は日本人には無いのである。僕は一度もこのような眼を日本人に見たことはなかった。その後も特に意識して注意したが、一度も出会ったことがない。つまり、このような憎悪が、日本人には無いのである。『三国志』に於ける憎悪、『チャタレイ夫人の恋人』に於ける憎悪、血に飢え、八ツ裂にしても尚あき足りぬという憎しみは日本人には殆んどない。昨日の敵は今日の友という甘さが、むしろ日本人に共有の感情だ。凡そ仇討にふさわしくない自分達であることを、恐らく多くの日本人が痛感しているに相違ない。長年月にわたって徹底的に憎み通すことすら不可能にちかく、せいぜい「食いつきそうな」眼付ぐらいが限界なのである。



図1　江戸時代の食玩[[1]](#endnote-1)

伝統とか、国民性とよばれるものにも、時として、このような欺瞞が隠されている。凡そ自分の性情にうらはらな習慣や伝統を、恰も生来の希願のように背負わなければならないのである。だから、昔日本に行われていたことが、昔行われていたために、日本本来のものだということは成立たない。外国に於て行われ、日本には行われていなかった習慣が、実は日本人に最もふさわしいことも有り得るし、日本に於て行われて、外国には行われなかった習慣が、実は外国人にふさわしいことも有り得るのだ。模倣ではなく、発見だ。ゲーテがシェクスピアの作品に暗示を受けて自分の傑作を書きあげたように、個性を尊重する芸術に於てすら、模倣から発見への過程は最も屡々行われる。インスピレーションは、多く模倣の精神から出発して、発見によって結実する。

　キモノとは何ぞや？　洋服との交流が千年ばかり遅かっただけだ。そうして、限られた手法以外に、新らたな発明を暗示する別の手法が与えられなかっただけである。日本人の貧弱な体躯が特にキモノを生みだしたのではない。日本人にはキモノのみが美しいわけでもない。外国の恰幅のよい男達の和服姿が、我々よりも立派に見えるに極っている。

　小学生の頃、万代橋という信濃川の河口にかかっている木橋がとりこわされて、川幅を半分に埋めたて鉄橋にするというので、長い期間、悲しい思いをしたことがあった。日本一の木橋がなくなり、川幅が狭くなって、自分の誇りがなくなることが、身を切られる切なさであったのだ。その不思議な悲しみ方が今では夢のような思い出だ。このような悲しみ方は、成人するにつれ、又、その物との交渉が成人につれて深まりながら、却って薄れる一方であった。そうして、今では、木橋が鉄橋に代り、川幅の狭められたことが、悲しくないばかりか、極めて当然だと考える。然し、このような変化は、僕のみではないだろう。多くの日本人は、故郷の古い姿が破壊されて、欧米風な建物が出現するたびに、悲しみよりも、むしろ喜びを感じる。新らしい交通機関も必要だし、エレベーターも必要だ。伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである。京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動かなくては困るのだ。我々に大切なのは「生活の必要」だけで、古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康なのである。なぜなら、我々自体の必要と、必要に応じた欲求を失わないからである。

　タウトが東京で講演の時、聴衆の八九割は学生で、あとの一二割が建築家であったそうだ。東京のあらゆる建築専門家に案内状を発送して、尚そのような結果であった。ヨーロッパでは決してこのようなことは有り得ないそうだ。常に八九割が建築家で、一二割が都市の文化に関心を持つ市長とか町長という名誉職の人々であり、学生などの割りこむ余地はない筈だ、と言うのである。

　僕は建築界のことに就ては不案内だが、例を文学にとって考えても、たとえばアンドレ・ジッドの講演が東京で行われたにしても、小説家の九割ぐらいは聴きに行きはしないだろう。そうして、矢張り、聴衆の八九割は学生で、おまけに、学生の三割ぐらいは、女学生かも知れないのだ。僕が仏教科の生徒の頃、フランスだのイギリスの仏教学者の講演会に行ってみると、坊主だらけの日本のくせに、聴衆の全部が学生だった。尤も坊主の卵なのだろう。

　日本の文化人が怠慢なのかも知れないが、西洋の文化人が「社交的に」勤勉なせいでもあるのだろう。社交的に勤勉なのは必ずしも勤勉ではなく、社交的に怠慢なのは必ずしも怠慢ではない。勤勉、怠慢はとにかくとして、日本の文化人はまったく困った代物だ。桂離宮も見たことがなく、竹田も玉泉も鉄斎も知らず、茶の湯も知らない。小堀遠州などと言えば、建築家だか、造庭家だか、大名だか、茶人だか、もしかすると忍術使いの家元じゃなかったかね、などと言う奴がある。故郷の古い建築を叩き毀して、出来損いの洋式バラックをたてて、得々としている。そのくせ、タウトの講演も、アンドレ・ジッドの講演も聴きに行きはしないのである。そうして、ネオン・サインの陰を酔っ払ってよろめきまわり、電髪嬢を肴にしてインチキ・ウイスキーを呷っている。呆れ果てた奴等である。

**注**

**参考文献**

指宿信（2000）「ネット文献の引用方法について—学術資源としてのネットの可能性—」<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/compass-028.html> （2017/5/7アクセス）

久保正敏（1996）『マルチメディア時代の起点：イメージから見るメディア』日本放送出版協会

郡司隆男・中村康夫 (1997) 「言語情報の特質」 藤本和貴夫、木村健治編 『言語文化学概論』 pp.107-120. 大阪大学出版会

城国太郎（2018）『江戸時代の庶民文化』講談社学術文庫

杉尾敏明・棚橋三代子（1992）『焼かれた「ちびくろサンボ」—人種差別と表現・教育の自由』青木書店

田中秀臣（2010）『AKB48の経済学』朝日新聞出版

フーコー、ミシェル（1990）「作者とは何か？」清水徹・豊崎光一訳,『作者とは何か』（ミシェル・フーコー文学論集１）, pp.9-72, 哲学書房

町田健（2003a) 『日本語文法の正解』 小学館

町田健（2003b）『日本語文法への招待』集英社（集英社文庫）小池清治、赤羽根義章（2002) 『文法探求法』（シリーズ<日本語探求法> ２）　朝倉書店

**謝辞**

　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊。

2018年1月3日

城国 太郎

1. 江戸時代の食玩文化については、城国太郎（2018）pp.22-24を参照。 [↑](#endnote-ref-1)